

## 姉川・高時川流域 斜め写真

秋葉湖

余呉町

妙野山（熊野富士）

七ヶ嶺ヶ岳

安蔵山

横山岳

余呉湖

油木内駅

熊ヶ谷

油木ノ本駅

木之本町

一高時川・妙野川合流点

高月町

高時川

小春山

山手山

湖北町

虎姫町

虎姫山

沢虎郷駅

高時川

姉川

姉川河口

長浜市

姉川の諸元（高時川流域を含まず）

流域の面積：157.5km<sup>2</sup>

河川の延長：31.3km

高時川の諸元（姉川合流点より上流）

流域の面積：212.0km<sup>2</sup>

河川の延長：48.4km

田川の諸元

流域の面積：35.4km<sup>2</sup>

河川の延長：18.0km

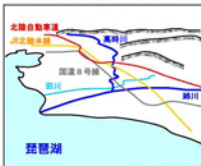
琵琶湖

姉川の右支川である高時川は、伊香郡余呉町にある橋ノ木峠（標高539m）の南方に源を発し、南下して長浜市落合町付近で姉川と合流します。

高時川の源は淀川の河口から約170km上流にあり、淀川水系の最北端に位置する水源です。



●概略位置図



## 姉川・高時川流域を襲った洪水被害



大正10年（1921年）の洪水による堤防の復旧工事（高月町 雨森）

姉川・高時川では、明治29年（1896年）の豪雨による洪水被害が最も大きく、木之本雨量観測所での総雨量は700mm以上に達し、浸水家屋が1万戸を超えるなど、大きな被害を受けています。また、大正10年（1921年）の台風や、昭和34年（1959年）の伊勢湾台風などでも甚大な被害を被りました。

昭和50年（1975年）の台風6号では、中河内雨量観測所での総雨量が350mmを超え、余呉町上丹生地先や下丹生地先で高時川の堤防が決壊し、浸水被害が起きました。虎姫町やむむ町（現、長浜市）でも、水位が上昇して堤防の漏水が発生しています。越水の危険性が高まりましたが、必死の水防活動によって辛うじて大被害をまぬがれています。

### 高時川の災害の履歴

| 年 月                 | 期 間   | 総雨量<br>観測所    | 人的被害<br>(死者・負傷者) | 家屋被害<br>(全半壊・一部壊滅) | 備 考                              |
|---------------------|-------|---------------|------------------|--------------------|----------------------------------|
| 明治29年8月<br>(1896年)  | 秋 豪 雨 | 717mm<br>(8日) | 3 8              | 1,070 2,210        | 8,063                            |
| 大正10年10月<br>(1921年) | 台 風   | 367mm<br>(9日) | 5 6              | 308 504            | 不明<br>高月町で堤防決壊                   |
| 昭和10年8月<br>(1935年)  | 台風11号 | 225mm<br>(4日) | 0 4              | 1                  | 不明<br>515 高月町で堤防決壊               |
| 昭和24年8月<br>(1949年)  | 伊勢湾台風 | 240mm<br>(2日) | 11 8             | 62 58              | 684<br>熊鷹地区に木之本町の<br>土砂災害(1人)を発生 |
| 昭和47年7月<br>(1972年)  | 暴 雨   | 480mm<br>(5日) | — —              | 0 数軒               | 62<br>高月町で堤防決壊                   |
| 昭和50年8月<br>(1975年)  | 台風6号  | 350mm<br>(1日) | — —              | 1 —                | 35<br>高月町上丹生で堤防決壊                |
| 平成10年8月<br>(1998年)  | 台風7号  | 150mm<br>(2日) | — —              | — —                | 4<br>木之本町決壊                      |



台風6号（550、8）の水防活動  
（旧むむ町籍織地内）

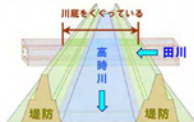
## 姉川・高時川流域図



# 先人たちの知恵と偉功 ー田川カルバートー



【イメージ図】

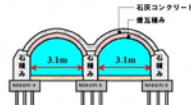


田川を、高時川の下をくぐらせ、『川の下を川が流れている』状態にしたのが『田川カルバート』です。  
江戸時代の終わり頃（安政時代）まで、田川は旧びわ町跡合地先で姉川・高時川と合流していました。姉川・高時川は土砂が積もって川底が高く、大雨が降ると田川が逆流して洪水になっていました。

文久元年（1861年）、高時川にカルバートを通し、田川の水を直接琵琶湖に流すようにしています。当時のカルバートは木製でしたが、明治18年（1885年）に煉瓦造りのものに改良されました。現在は、コンクリート製となっています。

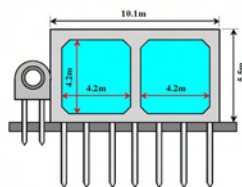
|               | 田川の治水の歴史                                                                                                     |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 文久元年頃（1861年）  | 高時川の河床上昇により、田川の洪水が著しく悪化したため高時川の川底を通過させる木橋を貫通。<br>延長98間（125.5m）、幅6尺（1.8m）、高さ4尺（1.21m）<br>田川新川を琵琶湖まで開削         |
| 明治18年頃（1885年） | 流下能力不足及び木橋の破損の危険性よりテレーク技師の実験検分により設計。円形穹状型2連の石炭コンクリート煉瓦造り。<br>延長109.2m、幅3.1m、高さ1.85m、流量49m <sup>3</sup> /s×2連 |
| 昭和4年頃（1929年）  | 高時川の改修工事に伴いカルバートの延長を追加。<br>延長98.3m、幅3.6m、高さ2.3m、流量49m <sup>3</sup> /s×2連                                     |
| 昭和41年頃（1966年） | 延長216m、幅4.2m、高さ4.2m、流量109m <sup>3</sup> /s×2連                                                                |

●明治18年（1885年）の改修断面



田川カルバート（入口）

●昭和41年（1966年）の改修断面



田川カルバート（出口）



田川カルバート（河道内）※高時川が瀬切れていた際に撮影

## 先人たちの知恵と偉功

### ● 高月町の梵鐘 (高月町西野)

「文化4年(1807年)5月23日、早朝より大雨が降り始め、同夜には洪水となり、堤防が12間半(約22m)が切れた。(中略)寺の鐘を早く何度も撞いて村中に異常事態を知らせた。」と野洲家年代記にあるように、通信手段の一つとして昭和10年頃まで『梵鐘』が使われました。



### ● 泉水と早鐘 (湖北町河毛)



旧 湖北町河毛の松島さん宅では「庭の泉水の石が水で隠れると、早鐘がなる」と伝えられていました。昭和15年生まれの松島さんが子供の頃、実際に石が水で隠れると半鐘が鳴らされ、男全員が川の警戒にでていったそうです。



### ● 洪水の様子を伝える郵便書簡

大正10年(1921年)9月、片山雅洲が知人に送った郵便書簡があります。この書簡では、高月町雨森の洪水の様子を絵と文章で伝えています。



## 洞寿院境内 森本警部水難の碑

湖北地方に大きな災害をもたらした明治28年(1895年)7月29日の洪水では湖北の諸川で氾濫が発生し、片岡村柳ヶ瀬(現、余呉町柳ヶ瀬)では、余呉川の氾濫で3棟を除いた全集落が浸水しています。

滋賀県は、急きょ森本兵二郎警部率いる救助隊を派遣し、警部らは献身的な救護活動にあたりました。しかし、8月2日の帰路、森本警部は増水した川に飲まれて殉死してしまいました。村人たちは警部の功績を後世に伝えるために洞寿院の境内に石碑を建て、その遺徳を讃えました。



森本警部水難の碑  
(余呉町洞寿院の山門を入って左側)

### 石碑の現代語訳

明治28年の7月は長雨が続き、29日には湖北の諸川で氾濫が発生した。高時川上流の丹生の村々では、最も被害が激しかった。山は崩れ、家は流され、稲も倒れ、橋梁も壊れて往来もできず、丹生村北部は孤立し、人々は不安にさいなまれた。

森本警部らは急遽現地に派遣された。警部は惨状を聞き、早く人を救いたいと思い、急いで部下を率いて救援に向かった。途路は災害のため寸断されていて、幾度も危険を冒しながら進み、途中の村々を勉め安心させながら、ようやく驚見村にたどり着いた。

あたりは、村中に土砂が流れ込み、民家のほとんどは埋没していた。警部は部下や作業員を指揮し、救援活動に尽力した。8月2日、警部は降り続く雨の中、勇気をふりしぼって出発し、険しい崖をこえ、濁流の川を渡るなど困難をこえて奥へ進んだ。尾羽祭村、針川村に至り、献身的に救援活動にあたって、村民たちは安らぎを得た。

その帰路、警部は増水した川で流れてくる石につまずいて溺れ、同行者の必死の救助もかなわず逝去された。この死を聞く者は、警部の勇気ある行動に感謝し、その殉職に心を痛めない者はいない。ああ、その死は、非常の死なのかそうでないのか...村民は森本警部を思慕し続けて石碑を建て、彼の功績を後世まで伝えたいと願った。私がこの概要を記した。君の名は兵二郎、森本はその氏である。徳島県士の族である。



## 今も生き続ける 自主水防の伝統

以前と比べると安全になっていますが、洪水の危険性は今でも隣り合わせです。現在も、自分たちの手で川と共存する道を切り拓いてきた先人たちの心を引継ぎ、日々、水防の努力が重ねられています。関係者の方々にお話を伺いました。

石と石が当たって起きるハラに響く低音の恐ろしさは、体験した者しか分からないでしょう。

実は4年前の平成10年にも姉川で床下浸水の被害が出ているんですよ。

ながわ かずし  
中川和司さん  
昭和29年ひわ町生まれ

かわち いさお  
川地 勲さん  
昭和16年浅井町生まれ

しもたに よいち  
下谷興一さん  
昭和13年余呉町生まれ

にしむら こうたろう  
西昌孝太郎さん  
大正9年ひわ町生まれ

その時、堤防は地震の時のようにブルブルと震えていました。  
“諦めては駄目だ”と再び作業につきました。

もっとも大切なのは、地域の人たちの“自分の地域は自分たちで守るんだ”という強い意志です。

自分たちの地域は自分たちで守ろう！  
水防活動で特徴的なのは、自分たちの地域は自分たちの手で力を合わせて守っていくという自主的な意志です。

出典：丹生ダム季刊誌「たかとき川」  
2002・Vol. 24

## 水 防 の 状 況



今でも台風や豪雨があるたびに、地元の消防団の人たちが水防団として警戒に当たります。役場へは気象台から1時間おきに情報が届き、いざとなれば招集がかかります。

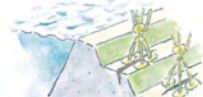
出勤したときの水防作業は、昔も今もあまり変わりがなく、堤防が激流で削られないようにすることと、漏水の箇所の補強が行われます。写真は昭和50年8月の出水の時のものです。

### ●水防工法

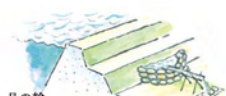
水防工法には、越水防止や漏水防止など、様々な状況に適応した工法が40以上あります。ここではその一部を紹介します。



シガラ（櫓：しがらみ）  
堤防が川の流れに接する部分に杭を打ち、そこに竹や木を交互に挟んで、堤防が削られないようにする工法。



五徳縫い  
堤防にできた亀裂を扶むように、五徳の形に竹を打ち込み、竹の弾力性を利用して、亀裂の拡大を防ぐ工法。



月の輪  
土のうを積んで川の水位と漏水箇所との水位差を縮めて水圧を弱め、漏水口が拡大するのを防ぐ工法。



木流し  
木の根の方を杭と綱で堤防に固定し、枝の方を流れにつけて激流をゆるめ、堤防が削られないようにする工法。